

シンポジウム報告

第35回国際応用動物行動学会への参加報告

矢用 健一

北農研センター 畜産草地部

2001年8月4日～8日までの5日間、アメリカのカリフォルニア州立大学デービス校で第35回国際応用動物行動学会が開催された。参加者は300名弱、口頭発表66題、ポスター発表124題であった。国際学会にしてはやや小規模だが、この程度の規模で毎年開催されており、皆が知り合いのようなアットホームな雰囲気と、家畜行動の本をよく書いておられるような欧米の重鎮とも気軽に議論できるような土壌が作られている。日本からの発表参加者は14名だった。

大会の内容

大会のメインテーマは、“Companion animal behavior”と“Influence of genetics on behavior and welfare”だった。前者では、イヌ・ネコ・ウマなどのコンパニオンアニマルの行動や飼育環境の評価、福祉といった研究の発表が見受けられた。口頭発表から大まかに抜粋すると、①子馬のさく癖、猫の尿スプレーマーキング、オウムの常同行動など、(人間にとっての?)問題行動 (behavioral problem) を、行動科学的にどのようにとらえ、治療すべきかという研究。②馬の性格や、盲導犬の資質などを、できるだけ早期に予察する研究。③犬の社会認識や、庭付きの家とアパートに住む犬の行動比較などの研究。などがあった。①については「人間がいびつな飼い方をするから、人間にとって都合の悪い行動が色々でてくるのはあたりまえだ。」と憤ってしまいそうになったが、考えてみれば、私が研究対象としている酪農も、ウシ本来の行動を様々な形で制約することで成り立っているわけである。

後者の“行動と福祉に及ぼす遺伝の影響”では、現在も、産乳量・産肉量・乳質などの生産形質に重点を置いて進められている遺伝育種を、家畜福祉向上のために応用できないかを模索する分野である。めまぐるしく代わる飼養管理環境に対する順応性を上げてやることで、福祉の向上については生産性の向上につながるのではないかと、という考え方である。一方で、鶏の羽つきなど、現在問題行動として取り上げられている行動が少なくなるような遺伝形質を探る動きもある。

その他のテーマを列挙する。①離乳の問題(豚・馬・肉牛)：離乳時の親子分離のストレスが主なテーマ。②

家畜管理上の問題：管理方法の福祉レベルを評価する手法に関する発表。牛の断尾、豚の鼻環の評価。痛いのか？ 行動の制約はないか？③人と動物の関係：子馬の初期馴致、ホルスタイン種乳牛の人への恐怖性と社会的順位の関係、子豚が人との関係を築く上での感受性期の存在など。④家畜の取り扱いと輸送：EUにおける家畜輸送に関する立法が終わり、この方面の研究は一段落した感があったが、輸送中の馬の行動や、早期離乳子豚の輸送方法に関する発表が行われた。⑤実験動物：飼育環境を現在よりも複雑にしてやること(環境エンリッチメント)が実験動物にとってより住みやすい環境であるかどうかの検討など。⑥環境エンリッチメント：畜産分野でも、この手法で問題行動やストレスを減らす試みがなされている。⑦社会行動と性行動⑧営巣行動と母性行動⑨異常行動

④の中に、「牛のストレス緩和フェロモン」なる発表があり、期待して聴講したが、企業が開発した製品のアピール的な部分があり、失望させられた。人間ではやりのアロマセラピーではないが、匂いで家畜の行動を制御する試みは、これからもっと研究されても良い分野ではないだろうか。

また、エコツーリズムが野生クマの行動に及ぼす影響、サーカスのトラや動物園のクマの常同行動など、日本ではあまり取り組まれてこなかったヒトが介在する場面での野生動物、動物園動物に関する報告が増えてきていることは注目される。

Akeoke 大会と見学ツアー

今大会では、面白いイベントがあった。Akeokeである。私は、私用で参加できなかったため、参加された信州大学の竹田先生の報告をご紹介します。

「Akeokeの正体ですが、いろいろなスライド(単なる風景や実験結果の図・表、ブタに乗駕するイヌ、訳の分からない写真など)を帽子の中に混ぜ、選ばれた人物がその中から5枚抜き取り、ほとんどつながりの無い5枚のスライドでストーリーを作り、面白おかしく発表するというゲームだったのです。さらに質疑応答まであるのですから、当てられた方は、たまったものではありません。そして、これを超有名な研究者が発表するので、とてもおかしく、半分言葉が分からなくても、結構、笑えました。」

というものだ。皆様も是非お試し下さい。

見学も、参加できなかったため、再び竹田先生の報告を抜粋する。

「私が参加したエクスカージョンは、Davis 校内を見学するツアーでした。当初、学内の牧場見学も予定されていたようですが、口蹄疫の関係で、なぜか昆虫博物館、そして霊長類研究センター、猛禽類センターの見学に止まりました。昆虫博物館と言っても、いわゆる昆虫学研究室なのですが、世界中から膨大な数のチョウを収集し、保存していました。またそこでは、クモやゴキブリを実験動物(?)として飼育しており、これには私も含め一緒に参加した麻布大の女子学生も参っていたようです。霊長類研究センターでは、幾つもの極めて大きなケージにサルが群飼されており、実験動物としてのサルを大学で維持・繁殖していました。猛禽類センターでは、単に研究ばかりでなく、その保

護を目的とした一般人への教育、そして負傷した猛禽類のリハビリも行っていました。日本でも獣医学科がある大学で、このような野生動物のリハビリセンターが早くできないだろうかと感じました。」

応用動物行動学分野での日本の躍進

学会総会において評議員の交代が告げられ、5人の候補者から新メンバー2人を選挙で選出した。今回、その内の1人に東北大学の佐藤先生が選出された。日本人で評議員に選ばれるなんて、私にとっては目玉が飛び出るぐらいの驚きであった。さらに、「ヒトと動物のアジア的共生と動物倫理」という統一テーマのもと、我が国での2005年大会開催も決定し、日本の家畜行動研究が世界に躍進していく息吹を感じることができた。